仮面ライダーSPIRITS～転移せし善悪の亡者達～

仮面ライダーハードエボル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

始まりの戦士…仮面ライダー一号を筆頭に、善と悪の仮面ライダーたちが生まれ、死んで行った…。

しかし、神のイタズラか悪魔の呪いか……亡者となった者たちが一つの世界に集まって行くことになる……

第２作目です。

長い目で見ていただければ幸いです。

目　次

EPISODE.00 ―――― 1
困惑する者達／嗤う者達
EPISODE.01 〝マスクド・ライダー〟 ―――― 6
EPISODE.02 困惑のヒューマギア ―――― 15
EPISODE.03 怒りの変身・・・ ―――― 23
EPISODE.04 会合する2つの始まり ―――― 32
EPISODE.05 新たな伝説の始まり・・・ ―――― 41
EPISODE.06 二つの疑惑 ―――― 52
EPISODE.07 迷子 ―――― 62
EPISODE.08 鬼 ―――― 68
EPISODE.09 改造兵士の涙 ―――― 76

EPISODE．００

一つの世界から生まれた最初の仮面の戦士、〝仮面ライダー一号〟。

彼を筆頭に世代を超え、世界を超えながら多くの仮面ライダー達が生まれて行った。

しかし、〝仮面ライダー一号〟のように正義の為に戦う〝善のライダー〟と相反するように、自らの野望と憎悪の為に戦う〝悪のライダー〟…。

世界を超えながら相反する善と悪の二種の仮面ライダー達が生まれ、時には衝突し、時には共闘していた。

そうして相反するライダー達は守るために、奪うために戦い続け、一人一人が死んでいった…

筈だった

神のイタズラか悪魔の呪いか死んでいった善と悪の仮面の

戦士たちは一つの世界に飛ばされ、死してなお戦う道へと進んでゆく。
・・・

――――――――――――――――――――――――

「撃っていいのは撃たれる覚悟のあるヤツだけだ」

「ここかぁ…祭りの場所はぁ？」

「ごちゃごちゃした戦いは嫌いなんだよね」

「俺を好きにならないやつは邪魔なんだよ…」

「俺に夢はない…でも、守ることは出来る」

「喰ってやろうか…」

「人に優しく出来るという事は、お前が強いということだ」

「すぅべぇてぇおぉ～…破壊してやるぅ～!!」

「さぁ…地獄を楽しみな！」

「俺は…人間を守る…！」

「これでジ・エンドだ!!」

「倒す…この手で…貴様を…！」

「最後の1匹を殺すまで、俺は何度でも狩りに行くぞ！」

「ライダー同士、楽しく戦いたいな！」

「戦うべき相手がいるなら戦え！そうしなければ、一生後悔するはずだ…！」

「永遠に生きる完璧な存在！それがゴーストだ!!」

「人を騙すには7割の真実と3割の嘘を混ぜることだ」

「私こそが神だァーー!!」

「生の執着がある限り、十分な戦いができない。だが、今の俺は死を背負って戦っている」

「悪の組織は……永遠……」

「この場で私が『死刑』を申し渡す!!」

「お前達に変わって、俺が悪を制裁する『英雄』になってやろう!」

「だから倒します!例え弱い私一人でも…倒さざるを得ない!!」

「勝てば正義負ければ悪…」

「再び得た命を…他の誰かのために使う。そんな悲劇…味わおうと言うのか?」

「お前たちの歴史って…醜くないか?」

「僕が始まりのライダーとなる…!」

「戦わなければ、人類は滅亡する」

「街を荒らした怪物を倒したんだ、これは正義ってやつだろ？」

「貴様はいずれ破滅する…それが貴様の、運命…」

「あなたに覚悟がある？」

「これが仮面ライダーのおぞましき力だ!!」

「私こそが真の黄金の果実、新世代の神だ！」

「戦え…最後の一人になるまで…」

「人間はみんなライダーなんだよ!!」

困惑する者達／嗤う者達

ＥＰＩＳＯＤＥ．０１　〝マスクド・ライダー〟

罪人よ・・・罪人の群れよ

・・・暗いニューヨークの摩天楼・・・息を荒げながら走る娼婦の女がいた・・・

主は嘆き悲しんでおられます

女娼婦を咎めるかのように顔を隠した神父の男が暗闇を舞う異形と共に追い詰めていた…

「愛さなければよかった・・・」と

神父に連れ添っていた異形が女娼婦に鉤爪を立てて傷を負わせた…

そうして流した黒い涙の中から・・・私たちは来ました

追い詰められた女娼婦が後ずさるが、異形の者たちが周囲を囲み近ずいてゆく…

悔い改めながら死に絶えなさい・・・愛されなかった人々よ・・・

神父の言葉を皮切りに異形の者たちが女娼婦に襲いかかり、女娼婦は無惨に殺された・・・

はずだった…

ビュウ　　バキッ！

「ギィッ!?」

『!!?』

強い風が急に吹いたかと思えば、女娼婦を取り囲んでいた異形の者たちが重い衝撃を受けて吹き飛ばされたしまった。

キキィーーッ！

「…?」ブルブル　チラッ…

タイヤの急ブレーキの様な音と同時に風が止み、目を瞑っていた女娼婦は震えながらも目を開けてゆっくりと音がした場所を見てみた…

「Are you okay?」

そう言って女娼婦に呼びかけたのはまるで飛蝗の様な出で立ちで、青い色をした鎧の様な別の異形だった…

「ヒィ…」ビクビク…

「…」

声をかけられた女娼婦は自分を襲った異形と同じのような常軌を逸した存在するに小さな悲鳴をあげた。

飛蝗の異形はそれを意に介さず、女娼婦を襲おうとした異形達に顔を向けた…

「貴様…何者だ?」

異形を連れていた神父の男が飛蝗の異形にそう言った。顔の見えない神父の声はどこか怒りがこもっていた…

「その姿…まるで彼らを葬った忌々しい裏切り者共を思いだす…」ギリギリッ

神父は歯を軋みさせながら、不気味な音を少しづつ出していた

「……」スッ

カシャン!カシャン!

Ｒｏｋｋｉｎｇｕ　ｓｐａｒｋ!

ビュウウッ!

「キャアアッ!?」

沈黙していた飛蝗の異形は腰に着けていた機械的なベルトにあるトリガーを2回引き、コミカルな音声が流れた。

それに反応するように、飛蝗の異形が目にも止まらない超高速に動き出し、女娼婦を抱えてその場を去っていった…

「逃げたか…まぁいい。あれが何者であろうと関係ない…全てあの方たちの贄にしてくれる……」スゥ

神父の男はそう呟き、闇の摩天楼の中に溶け込みながら消えていった…

女娼婦を抱えていた飛蝗の異形は警察署の近くに来たのを確認して、彼女をゆっくり下ろした。

「Ａｆｔｅｒ（後）　ｔｈａｔ（は），（彼）　ｒｅｌｕｙ（ら）　ｏｎ（に）　ｔｈｅｍ（と）（頼）（い）（い）…」

彼女にそう言った飛蝗の異形はすぐに背を向け、夜の街に飛んで行った…

～国連ビル　　ーＦＢＩ分室ー～

ここ、ニューヨーク州の国連ビルの中にあるＦＢＩ本部に担当の捜査官たちが一堂に会して会議をしていた。

「これまでに起こった謎の連続失血死事件…今までに１２人の被害者が出ている。彼等の共通点は皆、体液の九割が無くなっている」

「うへぇ…まるでミイラだな…」

「今回１３人目の被害者になりかけた娼婦、アリン・デイソン。彼女は被疑者に他の被害者たちと同じよう襲われていたが運良く逃げ切り、近くの警察署にて保護された」

「今現在彼女は入院をしており、詳しい事情聴取を行なっている」

「それとは別に最近増えているハーレムの失踪事件…時期的に見てもなにか関連があるんじゃないか？」

「関連たってどんな？」

「そこでだ…今回入手したものがこれなんだが…」

『！』

１人の捜査官がスクリーンに拡大されたある画像が表示された。

それは暗いニューヨークの街灯に照らされた夜の空を飛ぶ大きな鳥のようなものだった…

「なんですかコレ…鳥？」

「明るいこの街の夜ならカラスだって飛んでますよ」

「こんなモノ捜査の役にたつのか？」

ただの鳥の写真…捜査官達はそう判断し、まともに取り合おうとすらしなかった…

1人を除いては……

「ブップハハハハ！翼長四メートルのデカいカラスねぇ……」

「今までの失血死事件もハーレムの失踪事件も、その怪人が絡んでいるって線じゃないんですかねぇ？」

「怪人だぁ？」

「おい……お前は!!」

シャー……

窓の仕切りが開き、外の光が暗かった部屋り入り込んでその人物を照らしていた。

その男はサングラスをかけており、部屋の隅にふてぶてしく座り込みながら部屋の捜査官達を見て笑っていた嫌われ者…

滝（たき）　和也（かずや）

かつて〝始まりのライダー〟の二人とともに、SHOCKER（ショッカー）及びGELSHOCKER（ゲルショッカー）の2つの組織と戦い、壊滅

に導いた男…

「お前は部外者のハズだろ…サッサと出ていけ！」

「ハイハイすいませんねドーーモ」（（（・∀・））））ヘラヘラ

そんな男も本部の同僚達から嫌われ、窓際族の立場になっていた…

「ねぇ部長（ボス）…なんでＦＢＩはこの事件を公表しないんスかね？」

「フン、ここは経済の中心地だぞ…パニックを避ける為だ」

「いやいや、１３人も被害が出てたらホームレスでも噂が出ますよ？」

「なんで警戒命令が出ないんです？お得意の隠蔽工作？」

「それともこの国の誰かさんが…承知の上でやらせてる事…だったりして？」

「おい!!滅多なことを言うな！」ガシッ！

「お前に話すことは何もない」

滝のもの言いに血が上った部長がつい滝の胸ぐらを掴み、怒鳴ったら直ぐに手を離した…

「‥いいんですかねぇ？そんな手まわしの悪いことをしていて‥‥」

「‥この国に…仮面（マスクド）ライダーはいない…」

「なんちて！じゃぁそういう事で、失礼しました！」

バタン…

滝は笑いながらそう言って、会議室から出ていった…

「マスクド・ライダー…なんですかそれ？」

「フン…またか」

一言残して会議室を去った滝を見送った部長は呆れた視線とため息をし、質問をしてきた部下に答えた…

「奴の作り話だ…無償で人助けをする仮面の戦士…そんな酔狂な男がいるわけないだろ」ハァ…

見返りを求めず、ただ救うために戦う戦士…そんな絵物語の男なんているわけが無い。それが当たり前の反応だった…

今までは…

「あの…それなんですが…」

「ん？」

マスクド・ライダーの話になった時、1人の捜査官が何か言いたそうに手を挙げた…

「実は被害者のアリン・デイソンが気になる事を述べてまして…」

「被疑者が人間じゃないとか化け物だとか言って、薬をやってるのか思えばそんな反応が無かったので一時的なパニック状態として無視してたんです」

「ですがその中にさっき滝が言っていたことがありまして…」

「何？」

被害者であるアリン・デイソンが言うには、自分を助けたのは機械的な体をした異形な男で、警察署の近くまで運んでくれたのだと。

その男は自分を降ろして直ぐに別の所に向かおうとしたから慌てて名前を聞き、こう返されたのだという…

仮面ライダー（マスクド・ライダー）と…

―ＥＮＤ―

ＥＰＩＳＯＤＥ．０２　　困惑のヒューマギア

ー国連ビル　　食堂ー

（仮面ライダーを名乗る謎の男…か？）

　会議室から出て直ぐに聞き耳をたてていた滝は聞いていた内容を思い返していた…。

　被害者を襲った異形の怪物…それ等から被害者を救った自身の知人とは違う仮面ライダーを名乗る存在…

（聞いただけだが姿形は似て非なる見てぇだ…何者かの自作自演か？）

「タキィ!!お前また捜査から外されたってぇ!?」

　思考していた滝に開口一番にそう言って怒鳴り声を出したのは、同僚であり人生の先輩でもあるホプキンスと言う窓際族だった。

「相変わらず地獄耳だな、ホプキンス」

「しょーがねぇだろ？俺は嫌われてんだから」

「滝さん口が悪いから」フフフッ

　そう笑って言ったのは食堂の給仕係りをしているブリジット女史であった。

　グビッゴクン！

「ごっそさん、ブリジット！」

「そんじゃ嫌われ者は嫌われ者らしく、チカン逮捕に行ってくるぜ！」

「行ってらっしゃ～い！」

コーヒーを一気飲みした滝は2人に軽い挨拶を交わし、食堂を後にしてある場所に向かった…

ーニューヨーク裏路地ー
side…???

（俺は或人に倒されて…機能を停止したハズだった…）

自分は死んだハズだった…そう思考していたのは、両耳にヘッドホンのような物を着けた男…

より正確に言えば、人間と同じ姿をした高度のＡＩ（人工知能）を持つ人型ロボット〈ヒューマギア〉・飛電其雄（ひでんそれお）…。

かつてタイムジャッカーのフィーニスによって変えられた歴史で仮面ライダーゼロゼロワン001となり、過去へ飛んで来た息子・飛電或人（ひでんあると）の成長の為の壁となる為に自ら敵となった。

その後、息子の或人と激闘の末に敗北し歴史も元に戻り、機能を停止して消滅した…

しかし、機能が復活し、周りを見れば日本ではなくアメリカ・ニューヨークのハーレムにいた事に飛電其雄は困惑したものの、直ぐに情報収集を始めた。

ある程度情報収集を終えた其雄はハーレムにいたホームレスの人達と仲良くなり、近くにあった廃墟を拠点にした。しかしつい数日前、近くで女性が襲われている事に気づき〈仮面ライダー1型〉に変身して救助した。

（先日会ったあの怪物…僅かに人間と同じ骨格が確認できた…）

（つまりあの怪物は、人間をベースに造られた生物兵器…大きな組織でないと製造することは不可能…）

飛電其雄はそう思考しながら拠点でガラクタなどを使い、ある物を造っていた。それはある程度完成しており、後は実際に使ってみるだけとなっていた。

ガチャン！《ｌｅｆｔ》「フー…」《／ｌｅｆｔ》

「～～～」

「ん？」

外に出て最初に聞こえたのは、幼い少年の歌声だった。その少年は自分がこの地に来た時、色々手を貸してくれたスパイクという名で、将来は歌手として成り上がってハーレムの子供たちの助けになりたいと言っていた。

そんな彼は歌い終わった今、ハーレムの子供たちに囲まれながらいい笑顔で笑いあっていた。

「いい歌だったな、スパイク？」

「あ！ソレオのオッサンも聴いてくれてたのか!?」

「その調子ならアポロシアターのアマチュアナイトで成功も間違いなしだな」

「ハハッ！そんなこと言ったって何も出ねぇよ！」

彼は笑いながら謙虚に返した。その姿はまるで、息子が幼い頃に自分を笑わせると言った時の笑顔に見えた…

「スパイク、その人は？」

そう聞いたのは、ハーレムの子供たちの所に遊びに来ていた滝だった。彼の近くにはハーレムの無人の教会に赴任して来たペトレスク神父も一緒だった。

「この人はソレオ・ヒデンって言う日本人でこのハーレムに越してきた変わり者だよ！」

「今は近くの廃墟に住んでるけど、スゲー頭がいいから偶に俺らに勉強を教えてくれてるんだぜ！」

「へぇー？」

「俺はＦＢＩの捜査官をしている滝和也ってもんだ！つっても今じゃ窓際族みたいになってっけどな！」ハハハッ！

「俺は飛電其雄…このハーレムで彼等の世話になっている者だ」

「ところでアンタの両耳のそれは何だ？」

「これか？これは俺にとって体の一部の様な物だ」

ダブルライダーを支えた男…０１（ゼロワン）の壁として立ちはだかり、自ら踏み台となった父親（ＡＩロボ）…交わることのなかった２人が密かに出会い、軽い

会話を済ませて別れて行った

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ：夜の教会

「う・・・」　「あ・・・う」

ここはペトレスク神父が赴任して来た廃墟の教会…ここには神父に食事に誘われたホームレス達がいた。

しかし彼等は苦しみながらのたうち回っていた…それを虫を見るかの様な冷たい目をしていた。

「ひ…ひ…ひもじいよぉ…」

「なん…とかしてくれよ、神父様ぁ…」

「ひもじい…そうでしょう？生まれ変わるには沢山のカロリーが必要になりますからね…」

「今宵は月の下で外食でもどうです？」

「神の恵みのパンをほうばりながら…紅い…ワインを…」

ペトレスク神父はそう言いながら目を黒くして嘲笑うかのように見ていた…

ガチャッ

「！」

扉が開く音がして、入口を振り向けば昼間出会ったＦＢＩの滝が扉に背を預けて立っていた。

「・・・おや？滝さんでしたね、何か？」

「神父さん１人かい？」

「えぇ…ミナサン食事を済ませた後帰られました…」

２人ともなんともないただの世間話をしているがお互い信用しておらず、静かに腹の探り合いをしていた…

「なぁ神父さんよ…最近市長が変わって治安が良くなったニューヨーク（この街）でよ…人攫いやら吸血鬼事件やらコソコソやってる変態がいるみたいでなぁ…」

「丁度…アンタと飛電其雄ってのが来た時期にな・・・」

「教会やハーレムのような所には人が集まりやすいからな…なんか知らねぇかな？」

「う～～～～ん申し訳ありません。そのような噂は何も・・・ねぇ」

「そうか・・・邪魔したな。また来るよ、懺悔でもしにな」フゥ…

「えぇ・・・何時でも・・・」

そう言って滝を見送った神父のいる教会の暗い天井に、蝙蝠のような何かが潜んでいた・・・

side：スパイク

「おー、やるじゃねえかスパイク！アマチュアナイトの出場決まったって!?」

「まぁね」

「お前なら絶対いい話が来るぜ！」

「まぁね」

「かーーっ!!余裕だねぇ～!?」

スパイクがアマチュアナイトの出場が決まり、ハーレムに住む大人も子供もみんな彼が成功することを祝福しながら檄を送っていた。

（俺はマイケル・ジャクソンのように成り上がるんだ！）

（そんでもって俺達も捨てたもんじゃないって所をあいつらに教えてやるんだ！）

（1人もギャング何かにはさせねぇ…俺はこいつらの夢になるんだ

!!）

（夢に……）

ポンッ

「あ！」

「ペトレスク神父……？」

「スパイク君……ちょっと良いですか？」

スパイクに声を掛けたペトレスク神父の顔は笑顔だが、その冷たい目は獲物を見定めた狩人（ハンター）のソレだった……

ーＥＮＤー

ＥＰＩＳＯＤＥ．０３　怒りの変身・・・

ｓｉｄｅ：飛電其雄

（滝和也・・・かつて日本を中心に世界に猛威を振るった狂信的カルト集団ショッカー、あるいはゲルショッカーを壊滅へと導いた男・・・）
（しかし彼はそれを自分の手柄ではなく、協力してくれた〝仮面ライダー〟の存在・・・）

其雄は滝にあった後、滝和也に関する情報を探るためにＦＢＩとインターポールのデータベースをハッキングした。
彼と仮面ライダーを調べていく内に２つの組織以外にも、新たな組織が次々と滅んでは生まれていき、その度に新たな仮面ライダーも生まれていっている・・・

（組織が生まれ、ライダーが生まれて組織を滅ぼして組織が生まれの繰り返し・・・まるで進化の過程だ）

仮面ライダーが生まれ、組織を滅ぼす・・・まるで何かの実験の様に感じるこのサイクルに違和感を感じていた。

ガシャーンッ！

キャァァーーッ!!

「!?」

突然の破壊音と子供の悲鳴・・・即座に監視カメラをハッキングした其雄が見たのは、先日人を襲った異形と近い姿になったスパイクだった・・・

―――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ：ニューヨーク市街地

「まさか本当にあんな生物が・・・」

人を襲う連続吸血鬼事件の怪物が出たと情報が来て現場に向かったＦＢＩの部長が見たのは、屋上に隠れている怪物だった・・・

「ボス!あれを!!」

「!」

部下の1人が指を指した方向を見れば、呼んでいないはずの滝が怪物に近ずいていた・・・

「あのバカ・・・命令違反だぞ・・・!」

ｓｉｄｅ：滝

俺は・・・何を見ている・・・？見た目は怪人だが・・・震えるその背中を・・・俺は知っている・・・

「お前・・・スパイク・・・なのか？」

ビクッ！

そう問いかけてみたら、その怪人はゆっくりと俺の方を向いた・・・その顔は牙が鋭くて腕は蝙蝠のような羽になっていたが、間違いなく昼間あった涙を流す少年のスパイクだった・・・

「・・・・・・っ！」ギリッ

「タキさぁん・・・俺・・・今・・・どんなになってんの・・・？」

「なんか・・・体が・・・変なんだよぉ・・・ゴワゴワしてて・・・頭の中が真っ赤になって・・・」

スパイクは泣きながら経緯を話した…ペトレスク神父に誘われて教会に行ったこと・・・ギザギザした器具で体を煽られたこと・・・気が付いたら仲間の首に噛み付いてたこと・・・

「それから血が吸いたくてたまらなくって・・・アレ？」

「俺・・・誰の血を・・・スったんだっケ・・・？」

「スパイク・・・・・・エミリオだろ!!しっかりしろよ!!」

「アァ・・・ダメダ・・・アタ・・・マガ・・・ドンドン・・・ハッキリシナクナッテ・・・クル！」

「アイツモ・・・イッテタ・・・コウシテゼンブ・・・ワスレチマッ・・・

テ・・・ニドト・・・モドレナクナルッテ・・・!!」
「ギギィィーーー!!」
「スパイク!!」
　スパイクの残った理性が消えていき、ケモノの咆哮を上げながら、男に襲いかかった！
「スパイク!!俺の話を聞け!!」
「昔・・・仮面ライダーって男たちがいた!!」
　俺はスパイクを何とか抑えながらあいつらのことを話し出した。下の奴らがなにか叫んでるが関係ねぇ！
「アイツらもお前みたいに・・・クソどもに体をバケモノ同然に改造させられちまった・・・」
「それでもな・・・アイツらはそのゴリゴリの体で・・・悪党ども戦い続けた!!」
「無償でだ!!自分たちのためじゃなく、全く知らない赤の他人のために!!」
「今だってそうだ!!」
ザシュッ
「今だってあいつらはどこかで戦っているハズだ!!」
　噛まれそうになっても・・・少し切られても・・・俺は説得を続けた・・・！
「どうだスパイク？いい話と思わねぇか!?」
「お前も同じだよ・・・ガキ共の夢になるんだろ!?」
「・・・」
（止まった・・・？）

キィーーーーーーーー!!ズバッ!

「グゥ・・・・!」

「!!ア・・・アァ・・・・」

「タ・・・タキ・・・さん・・・・!」

バサッ!

「逃げるぞ!撃てェ!!」

ドゥン!《ｌｅｆｔ》ドゥン!《／ｌｅｆｔ》

「ス・・・スパイ・・・ク・・・・!」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「バカヤロウ!俺が頭にきているのは命令違反だけじゃない!!」
「あの距離でなんで射殺できなかったのかって聞いてんだ!!」
「なんで撃たなかった?ぇぇ!?」

部長の叱責に滝は黙って聞いていた・・・そして手に持っていたスパイクのバンダナを見せつけるように突き出してハッキリと答えた。

「アイツの・・・夢を聞いたからだ!!」

そう言った滝は黙って現場から離れていった・・・その顔は怒りに満ちていた・・・。

（ダイジョウブ！イザってときはライダーが助けてくれるんでしょ？）
（仮面ライダーってタキさんの事じゃねぇの？）

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ：教会

「グ・・・ギギ・・・！」

教会に戻ったスパイクはもがき苦しみながら床をのたうち回っていた・・・そんなスパイクを叱責する元凶のペトレスク神父がそこにいた・・・

「なぜ殺さなかったのです、スパイク？」
「私の声は聞こえていたハズですよ？」

そう問いかける神父の目は真っ赤に充血しており、まるで道端のゴミを見るような様子になっていた・・・

「もうよろしい！」
「あなたはそのまま出来損ない（ミスクリエーション）の干物になるがいい・・・」
「さて・・・ミナサン・・・」
「外には細く・・・美しい三日月が下がっています」
「愚かな罪人を串刺しにしたくなるような・・・ねぇ・・・」ニヤァァ…

ギィィ！　　ギギィィ！

その言葉に答えるかのように天井に隠れていた怪人達が不気味な声を発していた・・・

「やはり・・・これまでの騒ぎの原因はあんただったか・・・」

「!?」

「おや？あなたは・・・」

神父が声のした方向を見れば、そこに居たのは静かに怒りを込めた目で神父を見ていた飛電其雄だった。

「オッ・・・サァン・・・」

「お前か・・・スパイクを傷つけたのは？」

「それは人聞きが悪い・・・私と同じ選ばれし者にしてあげただけですよ？」

「最も、今となってはただの出来損ないのクズでしたがね・・・」

ペトレスク神父はスパイクを嘲笑いそう語り、飛電其雄をも見下していた・・・

「かつて俺には・・・夢があった・・・」

「？」

「俺が笑い、息子（或人）が笑い・・・人工知能（AI）と人間が笑いあえる世界・・・それが俺の夢だった」

「何を世迷い事を・・・」ハッ

神父とスパイクには理解できなく、困惑する内容だった・・・それでも其雄は語り続けた・・・

「だが俺は役目を終え・・・俺の夢を息子に託した・・・」

「今の俺の夢は・・・子供たちが安心して笑顔で夢に走れるように手助けをすること・・・」

「だがお前は・・・このハーレムの子供たちの希望になろうとしたスパイクの夢を奪った！」

カチャッ！

サイクロンライザー！

其雄は夢のために戦う力を作ったベルト・・〈サイクロンライザー〉を装着し、〈ロッキングホッパーゼツメライヅキー〉のスイッチを押した。

ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ　!!

「!?」　ピクっ！

ペトレスク神父は〈ロッキングホッパーゼツメライヅキー〉の発した電子音を聞いて反応を示したが、其雄は無視してポーズをとってワードを発した。

「変身!!」

《ｌｅｆｔ》カシャン！《／ｌｅｆｔ》ガキィン！

サイクロンライズ！

ロッキングホッパー！

ＴＹＰＥ　ＯＮＥ．

〈サイクロンライザー〉から人間大の機械の飛蝗が現れ、黒い霧と赤い電気が周囲を囲み、飛蝗が音声に合わせてバラバラになって其雄に鎧の様にくっついていく。

煙が晴れ、そこに居たのは先日、ペトレスク神父の邪魔をした裏切り者たちと同じ姿をした存在だった・・・

「貴様・・・何者だァ!!?」

そう問いかけたペトレスク神父に飛電其雄は静かに自分の存在を教えた・・・

「俺は人工知能搭載人型ロボ〈ヒューマギア〉の飛電其雄。そして・・・仮面ライダー１型だ！」

ーＥＮＤー

ＥＰＩＳＯＤＥ．０４　　会合する２つの始まり

ｓｉｄｅ：教会

「トォー！」バギィ！

「ギィィッ!?」

其雄は先制攻撃に飛び蹴りを近くにいた怪人にかまして吹っ飛ばした。

その勢いのまま怪人達の群れに飛び込み、事前に〈ラーニング〉していたデータを元に、怪人達を翻弄していく。

「カメンライダー１型・・・聞いた事もない名だ・・・」

「しかもヤツらと同じ嫌な事をする・・・」

「忌々しい・・・腹ただしい・・・！」

飛電其雄が変身した姿を見たペトレスク神父は、憎悪を込めた恐ろしい形相をしていた。

ガシャーンッ！

『!?』

ドルゥン！ドルゥン！

協会の窓をバイクで突っ込んで来たのは、武器を隠し持っており、全身黒スーツに纏っていて、骸骨の絵が書かれていたヘルメットを被った男の姿だった。

「また無粋な方ですか・・・何者です!?」

新たな侵入者にペトレスク神父は怒りと呆れを混ぜた怒鳴り声で、侵入者に問いかけた。

「仮面・・・ライダー！」

「！」ピクッ

「ギギ・・・」「ギギギギ」《ｌｅｆｔ》「ギィィ！」《／ｌｅｆｔ》

「・・・」チャキッ！

ドパン！ドパン！

グチャ！

仮面ライダーを名乗った男は問答無用でショットガンライフルを撃ち、怪人の一体を倒した。

ギチッ

「ライダーーーッパァーーーーンチ!!」

ボオォン！

「おおらあああ!!」

「!!」

「ライダーーーッキィーーーーック!!」

バリバリバリバリ!!

「ギ・・・ギギィィ・・・!!」

ショットガンライフルを投げ捨てた男は火薬を着けた改造メリケンサックを着けて殴り飛ばし、スタンガンの数十倍の威力を持つ改造ブーツを履いた蹴りで撃破した・・・

「おぉおお!!」

撃破した勢いに任せて、仮面ライダーを名乗る男も怪人達に飛びかかり、撃破していく。

―――――――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ：其雄

(声帯・体格・行動パターン・バイクのナンバー・・・その他全て分析し、滝和也と確定・・・)

仮面ライダー1型となった其雄は自分の後に入って来た男を戦闘しながら分析し、正体が昼間にあったＦＢＩ捜査官だと確信し、彼と共に倒し続けた。

そんな中でもペトレスク神父は顔を俯いたまま、微動打にしなかったが、其雄は僅かな音や心拍数の上昇、骨格の変化に気付いた・・・

「仮面ライダー・・・私を愛してくれたあの方達を壊したのも奴らでしたね・・・」

「！」

「誰もが罵った私の力を・・・彼等だけが認めて下さったのにいいい！」

ガパッ！キィーーーーーーー

「貴様、ショッカーの・・・！」

シュカッ

「！ダ・・・ギ・・・ザン・・・」

「ヴ・・・ヴァ・・・!!」

「スパイク!!」

ペトレスク神父の正体に気付いた滝だが、神父の放った鋭い音波の斬撃がヘルメットだけを真っ二つにした。

その素顔を現した滝を見たスパイクは教会を出て、飛び立ってしまった。

「おい！逃げたって何も」

「どこを見ている？」ビュッ

「危ない！」

ガキィン！

ペトレスク神父の攻撃を察知していた1型は咄嗟に滝を庇い、神父の攻撃を代わりに受けた・・・

「っ・・・！」

「その声・・・あんた、飛電其雄なのか!?」

「今は・・・それどころじゃない！」

自分を庇った仮面の男[1型]の正体に気づいた滝だが、それどころではないと1型に止められた。

「しかし、・・・今の私には新しいパトロンが愛してくれています・・・」

ペトレスク神父は肉体を変身させながら翼による攻撃を繰り出していく・・・

1型は滝を背に庇い、繰り出されていく攻撃を受け止め・流し・喰らっていた・・・

「クゥウッ!!」

「其雄ォ!!」

攻撃を繰り出し、完全な変身を遂げたペトレスク神父の姿は3メートル台の大きな蝙蝠怪人に変貌していた。

「カメンライダー・・・何処がだ？」

「あんな小さな生き物1人救えずに・・・」

正体を現した蝙蝠怪人は1型と滝を嘲笑いながらひとつの事実を突きつけた・・・

「オマエラガ・・・カメンライダー?」

「コノ・・・オオウソツキノ・・・ニセモノドモメ・・・ヒ・・・ヒヒ!」

「ク・・・ソがぁ・・・!!」ギリッ

滝は蝙蝠怪人の言葉に怒りながら自分自身にも怒っていた・・・蝙蝠怪人の言うとうり、自分はスパイクを救えていない事実・・・

自分はあの二人の様な仮面ライダーじゃない・・・その上、仮面ライダーと同じ姿になった飛電其雄に守られている現実・・・

滝は自分の弱さに・・・情けなさに・・・悔し涙を流していた・・・

「確かに・・・貴様の言うとうり俺たちはニセモノかもしれない・・・」

「!」

1型は蝙蝠怪人の言いざまに否定する事ははしなかった・・・小さい子供1人救えず、怪人の良い様にやられているのだから・・・

「それでも俺たちは折れてはならない・・・諦めてはならない・・・」

「一度・・・仮面ライダーを名乗ったなら・・・俺たちは戦い続ける・・・」

「ただ一つ・・・子供たちが明るい未来を・・・少しでも笑って歩いて行ける様にする為に・・・」

「それが・・・仮面ライダーを名乗った者の責務だ!」

飛電其雄は構えを取りつつ、息子の或人との最後を思い出しながらそう宣言した・・・

「其雄・・・」

滝は聞いた・・・飛電其雄の・・・仮面ライダーとしての覚悟を・・・その後ろ姿はあの二人と重なって見えた・・・

「・・・ナラバオノゾミドォリ・・・アノヨヘオクッテクレルワァ!!」

ガパッ!

1型の言葉に怒りが頂点に達した蝙蝠怪人は口に超音波を貯め、放とうとしていた・・・その時!

ドルゥン!ドルゥン!

滝が突入した所からまた、乱入者が現れた。そのシルエットはその乱入者専用のマシン〈サイクロン号〉の逆光で見えにくかったが、その存在感は教会にいる者を全てを圧倒していた。

「キサマ・・・マサカァ・・・ナゼココニィ・・・!!」

「お前・・・」

「・・・まさか・・・?」

本郷猛(ほんごうたけし)

彼こそがショッカー及びゲルショッカーを壊滅に導い男であり、全ての仮面ライダー達の原点となった存在・・・

「すまない滝・・・遅れてしまった・・・!」

「バッ・・・カヤロォ・・・・!」

本郷の声掛けに滝は再開の喜びと安堵の声で泣き笑いを見せた・・・ス・・・

軽い挨拶を交わした本郷猛は左手を腰に当てて右手を左斜めにかけた・・・

その右腕を左斜めから右斜めへ移動させ、右手を腰へ勢いよく引くと同時に左手を斜め右へと突き出してワードを発した。

ライダー・・・

変身!!

その瞬間、本郷猛の体の一部である変身ベルト〈タイフーン〉の蓋が開き、ベルトのなかにあるプロペラが勢いよく回転した事によって強風が発生した。

その強風は変身ベルト〈タイフーン〉に吸収されていき、本郷猛の体は緑の鎧と銀の手袋とブーツに纏わり、顔の面は赤い目の飛蝗に変わった。

仮面ライダー一号

この姿に変身した彼こそが数多の世界に生まれた全て仮面ライダー達の原点であり、敵である多くの怪人達を恐れさせた最高の英雄の姿である・・・

昭和に生まれた全ての始まりの仮面ライダー

令和に生まれた令和ライダー一号の原点のライダー

本来交わるハズの無い者たちが出会った瞬間であり、本来この世界が進む未来のレールから外れた瞬間である・・・

ーＥＮＤー

ＥＰＩＳＯＤＥ．０５　新たな伝説の始まり・・・

ｓｉｄｅ：１型

（あれが・・・仮面ライダー一号・・・）

其雄はこの世界で得た情報で知ったこの世界の始まりの仮面ライダー一号・・・本郷猛を見て息を飲んでいた。

始まりの仮面ライダーとしての威厳・・・存在感が教会の中全てを圧倒していた。

「敵は多いな、滝・・・」

「いや、大した事はないか・・・」

「そいつが誰かわからんが・・・滝を助けてくれたんだろ？」

「今夜は俺とお前たちで・・・トリプルライダーと行こうじゃないか」

仮面ライダー一号は２人に近づき、滝と１型の肩を並べながらそう語った・・・

「シャラクサイワァァァ！」

ジュオォン

キイィン

「キイイイ！」

（片手だけで攻撃の軌道を変えた・・・！）

１型は仮面ライダー一号の素早い反射神経と耐久力を間近で見て戦慄を覚えた・・・

今の蝙蝠怪人が放った攻撃は巻添えを喰らった雑兵を真っ二つに

する程の威力を持っていた。
1型の計算上、自身が喰らったらやられないとは言え相当のダメージを受けているのは確かだった・・・

「!?」
「ヤツメ・・・ドコニ!?」

蝙蝠怪人が攻撃を逸らされた事に気を取られてる間に、一号は姿を消していた。

（今の一瞬で天井に！）

1型は一号が攻撃を逸らした瞬間、天井にまで飛び上がって攻撃の態勢に入っていたのを見ていた。
蝙蝠怪人も一号が天井にいたのに気づいたが既に手遅れだった。

「ライダァァァキィーーック!!」

天井を足場にした場所だけで、そこの屋根は崩れ落ちた・・・

「ギィャャャーーーー!!」

一号の放った鋭い蹴りは蝙蝠怪人の左腕を切断した。
腕を取られた蝙蝠怪人は痛みに叫びながら外で飛び立ち、雑兵の怪人達も大量に飛び立って行った。

「！まずい、こいつらもうイッちまってる!!」
「外に出たら見境なく人を襲っちまうぞ!!」

「！」

状況を整理した1型はデータを発信してある物を呼び寄せた。

ブルルン！ブルルン！

そのマシンは1型と同じ色合いであり、仮面ライダーゼロワンの使う〈ライズホッパー〉を少し厚くしたマシン・・・〈ホッパーサイクロン〉である。

1型がこの世界で使う自身の移動用の手段として造った専用マシンである。

「俺があの神父を追う！二人は街の方に逃げた怪人達を頼む！」

「Σおい！ちょ」

ブルルウゥゥゥゥン！

「行っちまった・・・」

ドルゥゥゥゥン!!

「・・・」

シィィン・・・

「そうだ忘れてたぜ・・・」

「アイツは人より遅く来るくせに人より早く行っちまう嫌なヤツだった・・・」

「つか、ヤツも言うだけ言って先に行きやがった・・・」

「どいつもこいつも待たねぇかぁーー!!」（怒）

１型と一号・・・この二人に置いて行かれた滝は自分のバイクを急いで起こして、遅れながら後を追った・・・

―――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ：ニューヨーク市街地

「おい！あれ・・・」

いつものニューヨーク・・・いつもの夜・・・いつもの日常・・・誰もがそう思っていた街中でひとつの声が上がった。

１人が指を指した方向を見れば、空を飛ぶ陰が自分たちに向かっていた。

陰の正体は最近の不可解な事件の張本人であり、物語の中でしか存在しないハズの大量の吸血鬼だった。

「き、吸血鬼の大群だぁぁ!!」

「なっ何でぇ!!?」

「知らねぇよ！早く逃げろォ!!」

吸血鬼の大群は街の人々を襲い、血を吸い始めた・・・いきなり始まった殺戮に逃げ惑う人々・・・
絶望と恐怖の塊に襲われた街の住民に為す術がなかったその時、バイクの音が聞こえてきた。

ドルゥン！ドルゥン！

そのエンジン音が聞こえた時、吸血鬼達は動きを止めて音の方向に目を向けた。
そこには専用マシン〈サイクロン号〉を乗りこなしながら吸血鬼を追っていた仮面ライダー一号がいた。

「トォウ！」

「ライダァァァパァーーンチ！」

バギィ！

「ウォォォ!!」
〈サイクロン号〉から飛び上がり、飛んでた一体に一撃与えそのまま戦闘に入っていった。

突然現れた怪物から自分たちを守るために現れた仮面の戦士・・・
そこにまた別の戦士が現れた。

ドルゥゥゥゥン!!

「コラ一号ーー!!」
「何俺を置いて行ってんだテメェ!!」

ビュゥン！

「オゥラァァァ!!」

バチバチバチバチ!!

「ギィィィィ!?」

バイクから飛び出して特殊ブーツの必殺蹴りをかました滝はその勢いのまま、一号と暴れ出した。

「お前なら直ぐに追いつくと・・・分かってたからな！」

「へ！そりゃどうもッ!!」

お互いに背中を合わせながら雑兵を撃退していく二人・・・

「それで一号！あの飛電其雄ってのはお前と一文字の後輩なのか!?」

「・・・いや」

「確かに俺たちは後輩がいるが、その中にあの男はいない・・・」

「だが、あの男の覚悟と信念は信用に足る事が分かった・・・」

「何より！子供のために怒り、お前を守った・・・それだけで十分だよ!!」

仮面ライダー一号（本郷猛）は雑兵を倒しながら滝にそう伝えた・・・

「・・・へ！」

「だったら早く片付けてアイツのところに行くか！」

滝はそう言い放ち、雑兵を倒して飛電其雄（1型）の元へ向かうと宣言して

いた。

――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ：ニューヨーク上空

バサバサ！

「グ・・・ゴブ！」

「カエラ・・・ネバ・・・アノ・・・オカタノモトへ・・・」

「ワタシヲ・・・アイシテクレルアノ・・・！」

蝙蝠怪人は一号に取られた左腕を抱えながら必死に逃げていた。

ブルルゥウン！

「！」

「ソレオ・・・！」

マシンのエンジン音がして振り向けば、そこに自分を追ってきた1型がいた。

「フン！ムダナコトヲ・・・」

「ツバサヲモタンウジムシガ・・・！」

マシンで追うしかない1型を見て嘲笑った。1型は静かに何かを取り出して、スイッチを入れた。

リョコウ！

この世界で1型が造った〈リョコウゼツメライズキー〉をマシン〈ホッパーサイクロン〉に差し込んだ。

〈Ｆｌｙｍｏｄｅ！〉

マシンの前輪部分から小さい翼が生え、僅かな段差からはね飛んだ瞬間に前輪と後輪タイヤが二つずつに割れ、そこからエネルギーが噴出して蝙蝠怪人の元に飛んで行った。

「ナン・・・ダト！」

さすがにバイクが変形して飛んで来るのは予想外だったことで速度が少し落ちていた。

「ナメルナァァァァ!!」

キィーーーー！

ギィィン！

「！」

「ナ・・・ニィ!?」

「スパイクか!!」

蝙蝠怪人の攻撃を相殺したのは怪人にされたスパイクだった。

「コノ・・・クサレガキィィィ!!」

ザク！

「スパイク!!」

「オッ・・・サン・・・ソイツ・・・ブッ・・・コロ・・・」

蝙蝠怪人の攻撃を受けたスパイクは1型に伝え着る前に川に落ちていった。

「・・・分かった・・・」

其雄はサイクロンライザーのトリガーを二回引いて必殺技を発動した。

カシャン！カシャン！

「はぁぁぁ!!」

鋼

《ｌｅｆｔ》終《／ｌｅｆｔ》焉

蝗

「はぁ!!」
ロッキング
ジ・エンド

1型はマシン〈ホッパーサイクロン〉から飛び上がり、蝙蝠怪人に必殺技を仕掛けた。

「ヒ・・・ヒヒヒ」
「イイキニナルナニンゲン・・・」
「キサマラハ・・・カミニミハナサレタ!!カワイソウニナァ・・・ヒャハ、ヒャハハ!!」
「シヌ!シヌ!シニタエル!!」
「ヒトリモ・・・ノコラナイィーー!!」

「人の生きる世界に神なんていない!」
「例えいたとしても・・・必ず俺たちが勝つ!!」

蝙蝠怪人の意味深な負け惜しみに其雄はそう返して撃破した・・・

しかしこれは小さな始まりの序章でしかなかった・・・ここからこの世界で大きな戦いが起こるとは・・・誰も知らない・・・

side：ガモン共和国

この国はゲリラ戦が活発になっており、小さい村も犠牲になっている。

しかし、ひとつの戦場にある存在が現れ始めた。ひとつは戦場で両軍の武器を壊して暴れる〝紅い拳の悪魔〟と呼ばれる存在・・・

「はぁぁ！」ガギィン！

もうひとつは同じく戦場で武器を破壊していく赤と緑の色をした日本刀の様な武器を持つ、カラフルな鬼の姿をしていた。

その存在は両軍の兵士に恐れられ、こう呼ばれていた・・・

〈オーガ〉と・・・

ーENDー

ＥＰＩＳＯＤＥ．０６　二つの疑惑

ｓｉｄｅ：ニューヨーク・国際連盟ビル

「ねぇ見て滝さん！」

食堂の給仕係りのブリジットが食事中の滝にある新聞を見せた。

「おぉおぉ」

「俺らが暴れたのがデカく載ってんなぁ・・・」

その新聞には、先日の吸血鬼事件で自分を含めて街で暴れた仮面ライダー一号と飛電其雄（仮面ライダー1型）の写真が乗っていた。

ちなみに飛電其雄は本郷と共に行動することになり、既にハーレムから去っており、スパイクも本郷猛の持ってきた血清のおかげで元に戻っている。

「お前さんもだいぶ暴れとったからのぉ・・・」

「アイツらに比べたら可愛いもんだろ？」

ホプキンスの言葉に滝はコーヒーを飲みながらそう答えた。

「ねぇ滝さん！ライダー（カレ）の事詳しく教えてよ！」

「私すっごくハマったんだよ！」

「ん？一号のことか？」

「お前全く信用なかったクセに・・・」

ブリジットが本郷猛（一号）着いて聞いてきたので少しだけ教えることに

した。

「ヤツは仮面ライダー一号・・・俺のダチ公だ」

新聞の一面に載っている仮面の戦士を見ながらそう答えた。

「一号って・・・彼とあの青い仮面ライダーの他にもいるの!?」

「あぁ・・・」

「ウソーーン♥」

「ねぇ教えて教えて!何もかも!!」

「・・・・・・・・・」

「あぁ・・・いるさ・・・かけがえのないダチがもう1人・・・」

滝が見つめるノートパソコンに一通のメールが届いていた。

【滝、一文字の居場所が分かった。本郷猛より】

――――――――――――――――――――――

side:ガモン共和国リアング国際空港

本郷からもう1人の友、一文字隼人の居場所を知った滝は1人でガモン共和国という国に来ていた。

空港から出てきた滝にガイドの案内はどうかと地元の人間が近ずいて来た。

「そこのダンナ！ガイドの案内は如何ですかい！」

「荷物持ちますよ！」

その中の一人が滝の持っている新聞を見て気になる事を呟いた。

「あれ？この写真もしかして〝悪魔（ディアブロ）〟じゃねぇか？」

「アメリカにも出てきたんですかい？」

「〝悪魔（ディアブロ）〟・・・ってアクマァ？」

「何で仮面ライダーが・・・？」

そことき、滝のいる空港前の街中から3台の武装車が近くを走っていた。

「何だ？あの物騒な車は・・・」

「あぁ、グィン将軍の護送だよ」

「この間捕まったクーデターの首謀者の・・・」

「はぁ～ん・・・どうりで・・・」

「まぁ今から俺たちに奪還されるんだけどな」

バサッ

「へ？」

滝に声をかけたガイドの1人が持っていた包み布から小銃を取り出した。
それを合図に街の物陰に隠れていた武装した数人が現れて銃撃を始めた。

ドドドドドッ！

パンパンパン！

「ゲリラだぁー!!」

「応戦しろ！グィンを渡すなぁー!!」

グィン将軍を護送していた警備の人間も出てきて街中で酷い銃撃戦が始まった。

「おいおい！」
「街中でドンパチッて・・・!?」

ガチャッ

「！」

身を伏せて銃弾から逃れていた滝の頭にガイドが小銃を突きつけていた。

「グィン将軍の奪還、そして我等正当なガモンの民の存在を知らしめる為には被害が大きい程いい・・・」
「お前も尊い犠牲になる事を感謝するんだな！」

「お断りだ！」チャキッ！

「！」
「ち・・・・・・」ガキッ

タタタッ！

撃ってきたガイドの銃撃を躱して下から後ろに滑り込み、左腕を背に捻って拘束した。

「グ・・・」
「キ・・・キサマ・・・!?」

「お前・・・さっき〝悪魔〟とか吐かしてたな・・・」
「ありゃどういう意味だ？」

「チィ・・・知るか!!」

「あっそ・・・」クイッ

「ま・・・待て待て待て!!」

ガイドは〝悪魔〟について話し出した。
最近戦場で現れては敵・味方関係なしに殺戮を繰り返しているバケモノが存在しているらしい。

そのバケモノは〝悪魔〟と呼ばれており、アメリカの一号（悪魔）とは少し容姿が違うらしい。
その悪魔には血に濡れたような紅い拳をしており、戦場では〝紅い悪魔〟もしくは〝紅い拳の悪魔〟と呼ばれており、恐れられている。

「紅い拳だと・・・!?」
（まるでアイツ（二号）と同じ・・・？）

友の特徴・・・それに酷似した悪魔と呼ばれる存在だった。

「それにもう1つ・・・〝鬼（オーガ）〟っていうのもいるんだよ!!」

「は？オーガ??」

「そいつは〝悪魔〟の少しあとに現れたんだ！」
「〝悪魔〟と同じように戦場に現れて両軍関係なく襲って殺戮をしているんだ！」
「日本の刀って武器を持っていて、赤と緑の色をしてんだよ！」
「だから俺らはそいつを〝鬼（オーガ）〟って呼んでんだ！」

〝オーガ〟・・・仮面ライダー二号とは違う存在の異名が出てきて、疑問が新たに出来た。

ドドドドドド！

その時、護送車から脱出したグィン将軍が援護に来た兵士にゲリラごと蜂の巣にされ、血に倒れた。

「あああ・・・将軍・・・!!」

「そんな・・・グィン将軍が・・・」

「俺たちの・・・聖戦がぁ・・・!!」

ガシィ!

嘆いたガイドのゲリラに滝は殴り飛ばした。その顔は言いきれない怒りが見えていた。

「テメェ・・・ら!」

「何が聖戦だ・・・何が治安維持だ・・・」

ゲリラのグィン将軍奪還作戦による被害で無関係な一般人達が死傷者多数でてしまった。

その中には死者に泣きながら抱きつく子供の姿もあった。

「バッカヤロウどもが・・・!!」

目の前で始まった惨劇・・・何も出来なかった自身の無力・・・滝はただ、その一言しか言えなかった。

side：診療所

「寺・・・・・・」

「ココは診療所になってんのか・・・」

「まさに駆け込み寺って訳か・・・」

街中での襲撃の後、滝は他の負傷者たちと一緒に駆け込み寺に入っていた。

その駆け込み寺には、身寄りのない子供も多数いた。しかし、その目に生気は宿ってなかった。

「なぁ・・・医者はどこに」

タタタッ

滝が医者の居場所を子供達に聞こうとした途端、子供達は一目散に逃げるように去った。

「流石に逃げるのはねぇだろ・・・」

「仕方ねぇよ!」

「あの子達もさんざん嫌な経験をしちまったからな」

「ん?」

子供達に逃げられた滝に声をかけたのは日本の青年だった。
その青年の格好は動きやすくした着物に狩人が着るような毛皮を羽織っていた。

「医者を探してんだろ?」

「コッチにいるから案内するぜ」

「おお!すまねぇな・・・」

青年は滝に医者のいる所まで滝を案内をかってでた。
滝は青年の好意に素直に従って医者の所まで着いていくことにした。

「俺の名は滝和也ってんだ」

「お前さんはなんて呼べばいい？」

「俺か・・・？」

「カブキ・・・俺のはカブキだ」

―ＥＮＤ―

ＥＰＩＳＯＤＥ．０７　迷子

ｓｉｄｅ：診療所

滝は診療所関係者のカブキの好意で医者のいる所まで案内をしてもらっていた。

「オーイ！またケガ人が来たぞ！」

「奥につれてって！人手が足りないんだから！」

「って訳だからアッチに運んでくれ」

「おいおい…」

案内でつれてこられた診療所に居たのは日本人の女医がいた。彼女はやって来た滝達に手伝えと急がせた。

「もう!!こんなに忙しいのに隼人さんはどこ行ったのよ!?」

「さぁ？アイツの事だから子供達のところにいるんじゃないか？」

「…おい、今「ハヤト」っていったか？」

「？言ったわよ？」

「隼人…「一文字隼人（いちもんじはやと）」」

一文字隼人…かつて本郷猛と共にショッカー、ゲルショッカーと戦った滝のもう一人の親友でカメラマン。

彼は仮面ライダー2号と呼ばれており、もうひとつの名を「力の2号」と言われたほどの豪傑である。

そんな男の今は……

「まさかこんな異国の紛争地で戦場カメラマンをしてたとはな…」

「はは…俺は俺なりに動いてるだけさ…」

この会話の通り、一文字隼人は異国の紛争地を巡って取材をしている。

滝が再会したとき彼は、子供を笑わせようと変顔を披露していたが…

「新しい敵に新たなライダー…ね」

「それともう一つ…あの写真を見たゲリラが言ってたぞ?」

「〝悪魔(ディアボロ)〟とか言う化け物と似てるって…」

「他にも〝鬼(オーガ)〟とかいう妙なのもいるらしいじゃねぇか?」

「……」

「何かあ「ちょっと!!サボってないで手伝いなさい!!」…」

「あ、ワリワリ真美さん!!」

「真美ってのか…キツそうなやつだな」

「俺は洗濯をしてくるからあんた等は飯をやっといてくれ！」

カブキはそう言ってたまった洗濯物を洗い場に持っていった。

その後二人はケガ人の手当てや食料の給仕をしばらく手伝っていたが先に根をあげたのは滝だった。

「何やってんだ俺はーー…」

「たく…あいつは…一文字は世界を救える男だぞ…」

「こんなところで飯の炊き出しなんてしている場合じゃないんだぞ…」

「悪かったわね、こんなところで」

「あ」

診察所の女医である真美が滝の一人言にそうつっこんだ。

「昔の事は知らないけど放っときなさいよ」
「彼は彼なりにやってんだから」

女医の彼女が言うにはこの内戦で帰る家も頼る親も無くした子供達は殺し合いを続ける大人たちを信じることが出来なくなった。
そのせいで笑うこともなくなり、ケガをしているのに医者である彼女に身体を見せることもしなかった。
一文字隼人も彼女と同じ子供達に何も出来てない自分に腹が立っていた。

「そう言えばあのカブキってのはどうしてここに居るんだ？」

「……」

滝のカブキに対する純粋な疑問を問い掛けたが、真美は目線を下に向けて言うかどうかを迷ったが言うことにした。

「彼はね…よく分からないのよ」

「…は？」

真美が言うには、1年前に森の茂みに血まみれで倒れていたらしい。
手当てをして彼を救ったが問題は彼が目を覚ましてからだった…。

目を覚ました彼は診察所にしている建物の寺やテントに医療用道具を見て心の底から驚いていた。
日本語は喋れていたが、この国の言葉は愚か共通語である英語を喋るどころかその存在事態を知っていなかった。

その上日本の現在や今の世界情勢ですら全くの無知であったそう

だ。

「診察の合間を見つけては彼に色々と教えていたわ」

「私から見て彼は…まるで時代から取り残された迷子って所ね…」

「時代から取り残された？」

彼女の言葉を聞いて滝は少し納得していた…カブキの格好は今の時代では古すぎるから…。

その後話題に上がった［赤い腕の悪魔］に対する疑問と敵意を話しで滝が冷や汗を流したことを割合する…

「そう言えば…〝オーガ〟って奴も〝赤い腕の悪魔〟と同じことをしてるんだけど…」

「どうした？」

「被害にあった所から遺体を掘り返して土に埋めているそうなのよ…」

「まるでその人たちを弔うかのように…」

ｓｉｄｅ：カブキ

カブキは大量にあった洗濯物を三分の二まで終わらせたところで少し手を休ませていた…

「ここに来てもう一年か…」

カブキはそう呟いて自分の手を見つめていた…

「俺は…ちゃんと人間の役に立ってんのかねぇ？」

「なぁ…響鬼…明日夢…」

ＥＮＤ

ＥＰＩＳＯＤＥ．０８　鬼

ｓｉｄｅ：診療所

「今日はもう遅い・・・あんたも宿がないんならここで泊まっていくか？」

滝は結局この診療所で掃除に洗濯に後片付けを手伝い、時間を潰した。

外も完全に暗くなり出歩くには物騒な雰囲気でもあったため、カブキの話にのった。

「それがイイわね。明日の朝もまた手伝ってもらうけど」

「色々とすまねぇな・・・」

宿を取っていなかった滝はカブキと真美の厚意を素直に聞き、１晩泊まることにし。

しかし悪意は他の住民を気にすることなく無差別に襲ってきた・・・

ドカアァン!!タタタタタ!!

「銃声ッ!?」

「まさか近くで戦闘が!?」

「こんな・・・避難地区のスグそばまで!!!」

「・・・ッ!!!」

夜になった避難地区の近くでゲリラ戦が始まった。

そんな状況を見て、滝やカブキの大人たちは子供や怪我人を逃がすために外に出た。そんな中で真美は戦場の近くまで行き、叫び出した。

「やめてよ!!バカーーーー!!!」

「おい!危ねぇって!!」

「あんたたち互いに正義とか悪とか言って人を傷つけて・・・あんたたちはただ酔っ払って弱者を虐めてるだけじゃない!!!」

「子供たちにとったら殺し合う大人たちはみんな悪魔よ!!!」

「あんたの言葉はもっともだ!!だがあいつらに俺たちの声は届くことは無い!!今は早くみんなを逃がすんだ!!!」

「・・・・・・ッ!!!」ギリッ

身勝手な争いに真美は心から叫ぶが届くことはなく、銃声と爆音が響くだけだった。

真美は自分を連れ戻しに来たカブキと共に子供や怪我人の避難を手伝いに行った。

ｓｉｄｅ：隼人

「こりゃあ・・・この死に方は・・・・・・!!」

ゲリラ戦が起こった直後に隼人は現場に向かった。そこで見たものは無惨にも殺された兵士たちの死体が転がっていた。

なかには四肢が草の根の様に千切られ、戦車はまるで岩を投げられたかの様な大きな凹みがあった。

「う・・・うぅっ・・・・・・・!!」

「!?」

そんな中で今にも死にそうな僅かに息のある兵士を見つけ、彼から少しでも情報を聞き出すことにした。

「オイ・・・・・・しっかりしろ!!」

「ゴブ!!ゴホッ!!」

「悪魔・・・・・・だ・・・・・・ヤツら・・・・・・みんな・・・・・・」

「・・・・・・おい!」

最後の力を振り絞って言い残した兵士はそのまま息を引き取った。死んだ兵士の最後の言葉を聞いた隼人は最悪の状況を思い描いてしまった。

「ヤツら・・・・・・だと・・・まさか診療所が・・・!!!」

ｓｉｄｅ：診療所

診療所の門の壁の所に子供や怪我人を避難させていた滝たちがいた・・・・・・彼らの目の前には銃を構え、戦車の砲身を向ける武装集団がいた。

「おいおいここには怪我人とガキしかいないぞ?それが人間のやることか?」

そんな中で滝は冷や汗を流しながら少しでも逃げ出す隙を見出そうと武装集団にそう問いかけた。

「フム・・・・・確かに人道に反する行為だな」

「だからこそそのインパクトは実にいい宣伝になるのだよ・・・」

滝の問いに答えたのは戦車の入り口部分で指示を出していた指揮官だった。

「我々の戦闘力を知って・・・・・大国もついに契約を結んでくれたよ」

その指揮官は滝が昼間に見た護送車を襲撃し、救出に失敗して殺されたゲリラのリーダーのグィン将軍だった。

「グィン将軍・・・・・・!!!?射殺されたハズじゃあ・・・」

ジャコン!

「!」

「そのライフルにその戦車・・・・・最新型か?ゲリラにしてちゃあすぎた武装だぜ。お前らは一体・・・」

「今から1人残らず死ぬのだ・・・聞いてもなんの意味もあるまい・・・」

そう言って滝たちを見下すグィン将軍の目とセリフはニューヨークで会ったペトレスク神父と同じだった。

「!!」
「お前まさか・・・!!」
「よそ見するなぁ!!」　　ドカッ!!
「!?」
「お前は・・・空港の・・・・・・!!」

カブキが声を張り上げて滝に銃を射撃しようとしていた兵の1人蹴り飛ばした。
しかし立ち上がった兵士は滝が空港で見たガイドのゲリラ兵だった。しかしその表情は苦しそうで涙を流していた。

「ダン・・・ナ・・・・・・ロシ・・・テ・・・くれ・・・・・・」
「・・・・・・オーケー」

ガイドのゲリラ兵の涙の訴えを聞いた滝は改造メリケンサックを顔面に叩きつけ、爆破させた。
しかし煙が晴れて見たものは顔の皮が剥がれ、仮面ライダーに似た機械の顔だった。

「こっこいつら・・・・・・!!!」
「なるほど。今まで起きた虐殺は全部テメェらの仕業だったのか・・・!!」

滝とカブキは今までガモン共和国で起こった虐殺の真相に気づいた。
しかしゲリラに扮した怪人たちの凶器は未だ向けられたままであ

り、戦車の砲身も狙いを定めていた。

「何に気付いたかは知らんが・・・そのままくたばると良い・・・・・」

スゥ・・・

グィン将軍は滝たちを見下したまま砲撃手に合図を送り、砲弾を放った。

ドウゥン!!!

「やめろぉぉ!!!」

そこでカブキが叫びながら前に出て、後ろにいる皆の盾になるように突っ込んで行った。

「バカ!!死ぬぞ!!!」

「カブキさん!!!」

「フン、愚かな・・・・・・」

そんな三者三様の反応を無視し、カブキは腰に着けていた鬼の顔が彫ってある音叉取り出して腕に叩いて鳴らした。

「カブキィ!!!」

鳴らした音叉を額にかざしたその時、桜が舞うような光がカブキを包んだと同時に砲弾が直撃した。

「カブキィーッ!!」

砲弾がカブキに直撃し、誰もが死んだと思った。しかし晴れていく爆煙が舞うように動き、その中心が現れてきた。
そこに居るのは無惨に殺されたカブキではなく、歌舞伎役者の様なポーズをとった左右非対称の緑・赤・金色をしたカラフルな鬼で、胸の部分は肋骨のようなっていた。

「お・・・鬼・・・・・・・!?」

「カブキさんが・・・・・・・〝オーガ〟・・・・!!?」

カブキの正体に驚いた滝と真美は驚いて硬直した。カブキはそんな2人に目をくれず、グィン将軍を睨みつけるように見つめた。

「ギギギギィッ!!」

「〝音叉剣〟!!!」シュインッ!!

「ハァァ!!!」ザン!

「ギ・・・・・・・ギギ・・・・・・・ギ・・・・」

「ギ・・・ギ・・・コレデ・・・シネ・・・ル・・・!!」

ドガァァン!!

カブキに切り捨てられた改造兵士は嬉しそうに呟いて爆発した。
それを見たカブキは音叉剣を更に強く握りしめた。

「子供たちに・・・・・・手を出すな・・・・・・!!」

「・・・フフ・・・フフフフッ!!!」

そんな姿を変えたカブキを見て、グィン将軍は笑いが込み上げてい

た。

「良い性能じゃないか・・・・・・!!貴様の作戦目的とＩＤは!?」

グィン将軍はそう叫びながら改造兵士たちに合図を送り、顔を剥ぎ取りながら姿を現した。

「作戦?そんなモノはねぇな・・・・・・」

カブキはそう言いながら少しづつ改造兵士たちに近づいて行った。

「俺の名は〝歌舞鬼〟・・・・・・奈落の底に落ちちまった阿呆だ・・・!!!」

～ＥＮＤ～

ＥＰＩＳＯＤＥ・　０９改造兵士の涙

ｓｉｄｅ：診療所

「殺せェ!!そして我らに歯向かった事を後悔させてやれェ!!!」

「ギ・・・ギギ・・・・・・!!」

ダタタタタッ

グィン将軍の指示に従った改造兵士は銃弾の雨を歌舞鬼に向かって浴びせた。

しかし歌舞鬼はそれを自身の装備の１つである鬼傘を開いて銃弾の雨を防いだ。その上で鬼傘を使った〝鬼傘術〟で銃弾を改造兵士に跳ね返した。

「傘で銃弾を・・・!!」

鬼傘で銃弾を跳ね返されて逆に殺られたのを見た改造兵士の１部は銃からナイフや徒手に変えて向かって行った。

「ハァァ!!」

「ギギ・・・ッ!!」

歌舞鬼は鬼傘を閉じて迎え撃ち、時には鬼傘を開いて翻弄して〝音叉剣〟で切りつけて行った。

「つ・・・強ぇ・・・・・・・!!」

滝は変身した歌舞鬼の強さを見て息を呑んだと同時に新たな疑問

が浮かんだ。
滝は歌舞鬼がニューヨークで見た仮面ライダー1型（飛電其雄）と同じ仮面ライダーだという事を直感で感じた。
「カブキさんが・・・あの〝オーガ〟だなんて・・・・・・!!」
「あんたは知らなかったのか・・・?」
「ええ・・・でもあの人前にお酒飲んで酔った時に言ってたの・・・「俺は〝鬼〟失格だ」って・・・・・・」
「〝鬼〟・・・仮面ライダーじゃなくて・・・・・・?」
滝と真美がそう話しているなか、歌舞鬼は改造兵士と戦っていた。しかし元が統率された兵士である為少し苦戦していた。
歌舞鬼は元々戦国時代にいた人間であり、〝魔化魍〟と呼ばれる化け物退治の専門家であった。
故に、自身の生きた時代とは違う現代の人間の戦法や武器に未だに戸惑っていた。
「撃てェ!!!」
ドウゥン!!!
「!?」
グィン将軍はそんな僅かな隙を見逃さず、新たな砲撃を歌舞鬼に放った。それを見た歌舞鬼は咄嗟に鬼傘を展開しようとしたがその直前に歌舞鬼の前に〝赤い腕〟の人物が出てきて砲撃を防いだ。
ドガァァ!!!

「一文字ィ!!!」

「え!?」

滝が〝赤い腕〟の人物を呼んだ名に真美は目を見開いた。自身の知り合いの2人がガモン共和国で悪名高い存在だったのだから。

仮面ライダー二号

この世界で仮面ライダー一号の次に生まれた2人目の仮面ライダーであり、見た目は一号と似ているが僅かに違うのは手足のブーツが銀色ではなく赤色であった。

二号ライダーは一号ライダーと共に〝ダブルライダー〟と呼ばれる程の強者でもある。

「あんたが・・・一文字・・・・・・・?」

「そういうお前も・・・・・・カブキなのか・・・?」

互いが噂で聞いた〝悪魔〟や〝鬼〟であったことに多少の動揺を感じていた。しかし両者の後ろから襲ってきた改造兵士を同時に撃破した。

「お互い言いたい事があるだろうが今は後だ!!今はコイツらを片付けるぞ!!!」

「それは言われるまでもねぇな!!!」

2人はそう短く言葉を交わし、目の前にいる改造兵士たちのの撃破に努めた。

歌舞鬼は剣と傘で、二号は拳と蹴りの技で改造兵士を少しづつ減ら

した。その様子を真美や子供たちは少し怯えて見ていた。

「嘘でしょ・・・あれが・・・・・・隼人さん・・・あの人まで・・・」

「！」

滝は真美や子供たちの様子を見てしまったという顔をした。危険な戦場とはいえ、いきなり目の前で姿が変わったり銃弾や砲弾を簡単に防げる程の正に〝化け物〟になったのだから。

「そうだよ・・・あれが一文字隼人・・・〝仮面ライダー二号〟だ」

「歌舞鬼については俺も何も知らねぇ・・だがアンタも見たハズだ・・・アイツが俺たちを・・・ガキどもを守ったのを・・・!!」

滝はそう言いながら拳を強く握った。二号（隼人）と歌舞鬼（カブキ）の苦しみは滝には計り知れなかった。

「確かにあの姿になったアイツらはあの兵士たちと同じバケモノかもしれねぇ・・・しかしよォ・・・アイツらの心は人間なんだよ・・・・・・!!」

滝が言うには一文字は怒りのスイッチが入ると改造手術の名残りで顔に傷が入るらしく、異形の証であるそれを見られるのを嫌った。

「平気じゃないんだよアイツは・・・一文字は・・・・・・どうしようもないくらい人間なんだよ・・・!!」

「カブキのヤツに至っては会って一日も経ってねぇしアイツに何があったのかも知らねぇ・・・」

「だがアイツは子供たちを守るために戦っている・・・アイツも一文字と同じだ・・・アイツらが戦うのは・・・あのクソ野郎どもをぶっ潰す為の怒りの〝紅〟と〝鬼〟何だ!!」

滝の話を聞いた真美は目線を戦っている２人に戻した。あの２人がどんな過去を背負っているのかわわからないがそれでも子供たちの為に戦っているのは理解出来ていた・・・。

ｓｉｄｅ：歌舞鬼＆二号

（やっぱ魔化魍と勝手がちがう・・・これが未来の世界の力か・・・!!）

（滝が言ってたニューヨークに出た青の仮面ライダー・・・それと同じか全く別の存在と考えた方がいいな・・・・・・）

歌舞鬼は直面した時代の強さの違いを・・・二号は滝から聞いた歌舞鬼と１型の関連性を考察しながら戦っていた。

「イ・・・イタィ・・・・・・・!!」

「!!」

しかしその２人を殺そうとする１部の改造兵士達が涙を流しながら苦痛を訴えていた。

「アタ・・・マガァ・・・・・・・」

「イタイヨォ・・・」

「コ・・・・・・コロシテェ・・・」

「なっ!?」

「・・・・・・」

歌舞鬼は敵が自分たちに殺しを乞う事に驚きを隠せなかったが二号は静かに改造兵士を見つめていた。

「イタイヨォ・・・!!」

「ヒトヲコロスノモイタイヨォ・・・・・・・!!!」

「コ・・・・・・コロシテェェェ!!!」

「コ・・・・・・コロ・・・ギギギギギギ!!!」

「・・・・・・わかった・・・!!」

声を震わせながらそう言った歌舞鬼は鬼傘から布で出来た鞭〝鬼鞭〟に変えた。

それを巧みに操り、改造兵士を一気に複数捕まえて引き付けて音叉剣で叩き切った。

「うおおおお!!」

そして二号も空中に高く飛んで複数の改造兵士を引き寄せた。

「ライダアアアパアアアンチ!!」

ブゴオォン!!!

(お前たちは人間だ・・・)

「ライダアアアァチョオオオップ!!」

ゾバァァン!!!

（人間だ・・・・・・・!!!）

ドガァァ!!　ドゴォォン!!
ドガァァァン!!!

「・・・ヨカッタ・・・・・・・」

「アリ・・・ガ・・・・・・・トォ・・・・・・・」

改造兵士を倒した事で起こった爆発から歌舞鬼と二号はゆっくりと出てきた。
しかし長い苦痛から〝死〟の形で開放された改造兵士たちの安らかな声を聞いた2人は激しき怒りの炎を燃やしていた。

「ウウム・・・妙だ・・・・・・何故兵士どもの意識は苦痛を感じ、命令を拒むのだ・・・まぁだ頭（ココ）の弄り方が足らんかったという事かな?」

「・・・あ?」

「!」

そんな2人の怒りに目もくれずにグィン将軍は改造兵士の苦痛の意識を機械の不具合の様に見下ろし、自身の頭をコンコンとつつきながらそう言った。

「いや・・・最初っから全てこそぎ出して1から作り直してやるべきだったか・・・・・・?」
「ただのタンパク質の塊などではなく・・・・・・な?」

「!!」

「ク・・・・・・あのクソ将軍・・・!!!」

「キ・・・サマァ・・・「少し落ち着けよ・・・」ッ!!?」

グィン将軍の悪辣な言動に激情に駆られた二号は今にも飛び掛りそうな所を歌舞鬼は止めた。

「どうやら自分たちの力を自慢したいみたいだが・・・それだけなら診療所を襲う理由にならねぇ・・・・・・お前たちの目的は一体なんなんだ?」

「フム・・・面白いものを見せてもらった礼だ・・・・・・両軍の兵から武器を奪い戦闘を無理やり終わらせたお前達に免じて教えてやろう」

そう言いながらグィン将軍は自身の顔に手を添えて顔をつかみ始めた。

「戦争が産んだ・・・画期的な最高の兵器をな・・・・・・!!!」

顔面を掴んだ手を思いっきり引きちぎったグィン将軍の顔は人間から見目恐ろしい人間サイズの蜘蛛の顔が現れた。

～ＥＮＤ～